洋書総合目録カードの編成と利用

医学図書館 15(3): 249-253, 1968.

医学情報の
特集： 全国的ネットワーク

海老原正雄*

横山由美子

安原明子

1

総合目録が図書館間の相互貸借に不可欠のツールである事は今更言うまでもない。日本医学図書館協会は早くも戦前に於てこの事を認識し、加盟諸館所蔵雑誌の総合目録を完成していたが、戦後には更に外国図書の総合目録をも編纂した。Union catalogue of foreign books in the libraries of Japanese medical schools がこれである。この目録は協会加盟の医学図書館 15 館の所蔵洋書を昭和 21 年 3 月末現在で調査収録したものであるが、戦後協会から生長発展した医学図書館協会は、21 年 4 月以降の分をも総合目録として発行する計画を立てると共に取敢えず各館のカードを東大医学図書館内の協会事務局に収集してその整理に着手した。その後この作業は整理人員の不足の為一時中断のやむなきに到り、各館から送付されたカードの過半数は未整理のまま死蔵される結果になったが、幸い昭和 39 年以降慶大医学図書館が作業を再び継続することになり、現在同図書館にはカード形式の総合目録が設けられて活発に利用されている。

以下この総合目録の編成作業とその利用状況とを説明して一般の参考供しようと思ふ。

* Masao EBIHARA, Yumiko YOKOYAMA, Akiko YASUHARA, 慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館

2

昭和 39 年末東大医学図書館から当方に移管されたカードの枚数は約 6 万で、その半数は一応ファイルされていたが、残りの半数は完全に未整理の状態にあった。しかもファイルされた部分でさえ標目の統一が可成り不完全だったので、われわれとしては先ずこの部分を整備する事から始めた。標目統一の為の典拠としては N. L. M. の冊子目録を選び、これに Index-Catalogue, CBI 等のツールを援用する事にした。この部分が整備すると、次に未整理分のカードが逐次これに組入れられた。こうして将来の総合目録の母体となるべきファイルをどうやら完成する事ができたが、それには 2 年余の歳月が必要であった。母体ができ上がれば、その後の作業は比較的容易である。先ず送付されてくる各館のカードを標目のアルファベット順に配列して置き、それをうめ母体の目録のカードと照合して行く。目録の中に同一図書のカードが既に存在する場合には、そのカードに、追加カードに載っている所蔵館の印を押すだけでよい。しかし初めて出て来たカードの場合には、注意深くその標目を見ておかしな点があれば、カード上の他の記載事項を当たり、NLM 目録、CMI 等を調べたりして正しい標目の発見に努めねばならぬ。

さてこのような操作を行なっている間に気

の付いた点が幾つか出て来たので、それらに就いて述べてみよう。

1. *Advances, Progress* 類を単行本として取扱っている図書館があるとみえて、この種の文献のカードが送られてくるが、その中には編者を標目に扱っている例が時折見られる。

Montagna, William, ed.

Advances in biology of skin.

継続的に発行されるこの種の文献は、書名の方が編者よりも遙かに安定している以上、書名で取るのが合理的であろう。

2. コンフェレンス、シンポジウム類に就いて *Conference on, Symposium on* とすべきか、それとも編者を標目にすべきかは難しい問題で、N. L. M 目録自身に於ても一貫した方針があるようには思われないのであるが、これに対して国際コンフェレンス、国際シンポジウムは *International Conference, International Symposium* にとって大体間違いはないようである。図書館によっては、*Proceedings of the Fourth International Congress of Biochemistry* というふうに、書名でそのまま書き出している所があるが、このような記入の仕方は避けるべきである。

3. 前置語をもつ姓に対しては注意する必要がある。例えば *Van Bekkum, D. W.* は *N. L. M* 目録によれば *Bekkum, D. W. van* でとられている。しかし *Van* をいつも後へもってくればよいと思うのは間違いで、例えば *Van Peenen, Hubert J.* はこのままでよい。これは目録規則が、英語名の場合には前置語を前にして取るように規定している為であるが、しかし問題の姓が英語名であるか否かを判別する事は困難であって、このような場合には結局 *CBI* 程度のツールを具えこれを典拠にして解決する外はない。

4. 次に某図書館から送られて来た面白い目録カードをそのまま紹介しよう。

Schädel, Wirbelsäule, ed. *Lehrbuch der Röntgendiagnostik in fünf Bänden. Bd. 3.*

ed. by *Wirbelsäule Schädel* Sc. 6. Aufl. 676 p. 27 cm

Schädel というドイツ語名はよく見受けられるし、その上標目が著者表示と一致しているので、初めは不審に思わなかったのであるが、よく考えると *Wirbelsäule* は脊柱、*Schädel* は頭蓋の事である。名が脊柱、姓が頭蓋というのは奇抜過ぎるので、調べてみると *Schinz* の図書の第3巻の内容が *Wirbelsäule, Schädel, Nervensystem* になっている。つまり目録作成者は内容註記事項を著者と思い込んで上記のような傑作を作り上げたという訳である。

5. 標目は正しく選定されていても、綴りが間違っている場合がある。

Wast, John B Ventilation ; blood flow and gas exchange. Oxford, Blackwell, [1965] xii, 117 p.

Forsfall, Frank. L Viral and rickettsial infections of man. 4. ed., by Frank L. Forsfall and Igor Tamm. Philadelphia, Lippincott, c1965.

第1の例の *Wast* は *West* の間違いであり、第2の例の *Forsfall* は *Harsfall* でなければならない。こうした間違いは、同一図書のカードが何枚もある場合には発見し易いが、カードが1枚しかない時には見逃すおそれがある。特に第2の例では著者表示の方も *Forsfall* になっているので、*Forsfall* をそのまま信用してしまうことになる。こういう場合には勘に頼る外ないが、しかし勘に頼っていたのでは完全を期す訳にはいかない。そこでどうしても目録を作る側に、綴りに対する細心の注意を要求せざるを得ない。

6. 最後に記述の面で時折見受けられる欠点に就いて述べておこう。それは、版次が落ちていたり、出版年が違っていたり、頁数が不正確だったりする事である。同一図書に対する何枚かのカードを相互に照合する場合には版次、出版年、頁数が大切な鍵になる。これらの中で案外役に立つのは頁数で、あるカ

ードに版次が欠けていても頁数が同じであれば同じ版であると推定することができる。逆に頁数が不正確であったり、省略されていたり、或いはローマ数字を一緒に加算してつけてあったりすると、調査に手間がかかることになる。

3

総合目録の利用の面から考察してみると、統計にも現われているように利用件数は年々増加している事がわかる。この現象は総合目録の仕事に携さわる者にとっては非常に張り合いのある事と共に、互いに協力し役立つ事ができるという身近さと親近感が医学分野の図書館の発展に大いにプラスになると思われる。

* 1965 年～1967 年

	(所蔵)有	(所蔵)無	総 計
1965	75	90	165
'66	225	180	405
'67	212	228	440
計	512	948	1,010

* 1968 年 4 月～6 月

	有	無	計
4 月	21	9	30
5 月	16	12	28
6 月	27	12	39
計	64	33	97

* 1968 年 7 月 1 日～31 日

	有	無	計
Tel	7	6	13
Telex	1	0	1
Letter	13	8	21
Oral	4	4	8
計	25	18	43

* 1968 年 8 月 1 日～31 日

	有	無	計
Tel	12	9	21
Telex	0	1	1
Letter	35	5	40
Oral	3	1	4
計	50	16	66

昭和 40 年に慶応に総合目録の仕事が移ってから昭和 43 年 6 月迄総合目録の照合件数の統計は、照合件数・国内所蔵の有無のみを記録していたが、昭和 43 年 7 月からは照合依頼の様式別の観察も加えて見る事にした。これによると都内及び近郊からの照合は一、二件を除いてはすべて電話及び telex による申し込みであった。館内で直接図書館員に申合せのあったものは oral として取り扱った。なお、telex が普及すればその機能から考え合せて oral 以外のものは telex による依頼に変えられると思われる。telex によって文献照合の時間が大幅に短縮されればサービスの面からみて大変な収穫ではないだろうか。

次に照合に当たって起こる二、三の問題にふれてみる事にする。oral で受けた場合は直接依頼者から information を得られる為にあまり手間取る事はないが、oral 以外のものに関しては、ことに郵送によるものは、記載された事項のみが手掛かりである為に大いに推理を働かして求める書物を探し出すという事が多々起こる。

照合の手順として、まず記載されている著者名・学会名・Symposium・Proceeding 等で“目録”に当たって見るのだが、時折 textbook の中の或る一章を引用していて、その章を書いている筆者の名前の記載である為に目録上には何の手掛りも無いという事がある。このような場合出版年・出版地・など何か一つでもわかれば論文の主題を手がかりに NLM の目録から見当をつけて探し出す事になる。

照合に当って一番時間を費やす事は“目録”に求める本の見当らない時であって、まず記載事項の誤りに依って目録上に見当らないのか、本当に所蔵館が無いのかという事をつきとめることである。この調査をなおざりにすると利用者に対して大変申し訳のない事をしてしまい、ひいては図書館の信用にかかってくる。そこで、整理の章で述べたように、CBI, CMI, NLM 目録を用いて entry を確かめ、所蔵の有無を回答するのである。こ

の段階では依頼の用紙に書き込まれた information はすべて full に活用する訳であるから調査する立場から望む事としては, information が不十分であると思われる時はできるだけくわしく、たとえば、どこに引用されていた、というように手掛りとなると思われる information を書き込んでいただきたい。できることなら基本的な catalog 類のチェックの段階を済ませていただければ幸いである。

調査手順サンプル [1]

相互利用 ☐ 照会 ☐ 閲覧 ☐ 借用 ☐ 複写 ☐ ゼロックス ☐ フィルム ☐ ハツ切 ☐ キャビネ ☐ その他 () 申込	著者名: G. Woloszewicz and M. Olmon 題名: <i>Monographic Publications</i> 刊行所: <i>Wiley, Brown and Company, Boston</i> 年: 1966 頁数: 90-90 著者: <i>Tanen, D. and Barnette, R.J.</i> 題名: <i>The storage of audiotapes in the chrome film reels</i> 刊行所: <i>Ciba Foundation Symposium</i> 年: 1966 頁数: 1-10 著者: <i>see Ciba Foundation Symposium</i> 題名: <i>Proceedings, Vienna, 1965, 2V</i>	複写料金 基本料金 円 M F 円 差し引き 円 計 円 送料 円 合計 円 年 月 日 受領印	
	※ 申込者: 所属 <i>University of Illinois</i> 氏名 <i>John Doe</i>	☐ 所蔵なし ☐ 欠本 ☐ 欠号 ☐ 調査中 ☐ 貸出不能 ☐ 複写不能 ☐ 参照不能 (誌名 巻 年 著者 題名 頁) ☐ 貸出中 (月 日 再申込のこと) ☐ 製本中 (月 日 再申込のこと) ☐ その他	

図 1

- (1) 総合目録を見て、著者名の誤りを訂正。
- (2) editor の名前で見
see Ciba Foundation for the Promotion of International Cooperation となっている事が分る。
- (3) Ciba Foundation—の下に
Ciba Foundation Symposium on Adrenergic Mechanism 1960 とある。
- (4) 所蔵大学を知らせ、調査終了。

図 2

- (1) 詳細を見て、記載の著者名は該当頁の著者名だと判断した。

- (2) monograph とあるので、研究論文(収録)集か、学会のものと判断した。
- (3) Current catalog annual cumulation 1966 年で Radiochemical methods of analysis を見ると、
see Symposium on Radiochemical Methods of Analysis, Salzburg, 1964 とある。ここで Symposium の内容が 1 年遅れて 1965 年に出版されたものかも知れないという事で、
- (4) Radiochemical methods of analysis; proceedings, Vienna, 1965, 2V
1) Chemistry, Analytical

調査手順サンプル〔2〕

☐ 照会 ☐ 借用 ☐ ゼロックス ☐ フィルム ☐ その他 ()	題名・巻号・頁数・著者・論題 Radiochemical method of analysis. [Monograph] vol.2, 1965, pp.353-70. Lraga, J.H. Sealey, J.E. and Klein, P.D. Presence and effect of isotope fractionation in isotope dilution analysis; <i>See Symposium on Radiochemical Methods of Analysis, Salzburg, 1965 Radiochemical methods of analysis proceedings, Vienna, 1965 2.v.</i>	発 行 年 月 日 基本料金 円 M F 円 附しもの他 枚 円 計 円 造 材 円 合 計 円 発 行 年 月 日 受領印	
	☐ 所蔵なし ☐ 複写不能 ☐ 貸出中 (月 日 領再申込のこと) ☐ その他	☐ 欠 号 ☐ 照 査 中 ☐ 貸 出 不 能 ☐ 参 照 不 能 (誌 名 巻 年 著 者) ☐ 製 本 中 (月 日 領再申込のこと)	76015987 論 題 (版) 日 領再申込のこと 64. 11. 106

2) Radiochemistry-congress

とあり、該当論文の内容が記載してある
Vol. 2 にあてはまる。

- (5) 総合目録の Symposium on Radiochemical—で調べたが、国内に所載なし。
- (6) Current Catalog で NLM の申し込み番号を記した。QD601 S989r 1964 Cit. No. 11106
- (7) 依頼校にそのむね回答し、調査終了。

4

目下のところ総合目録の編成作業は一応軌道に乗って順調に進められてあるものの、尚改良すべき点が幾つかあるので、それらに就いて述べて置く。総合目録の作成にあたって最も肝要なのは、各々の参加館がその目録カードを遅滞なく継続的に送付してくれる事である。カードの記載方法に就いていろいろと難しい注文をつければ、各館は総合目録用として特別のカードを作成しなければならなくなり、その結果それらの送付が渋滞するおそれが出てくる。そこで当方としては、各々の図書館が自分なりに作成している基本カードのコピーをそのまま送って貰い、送付する側の負担をできるだけ軽減する方針を取って、い

る。その為でもあろうか、カードの収集に就いては、これ迄のところでは比較的好成績を収めているが、しかもその反面種々様々な記入様式のカードがファイルを構成する結果になった。勿論、先に述べたように、極力標目の統一を計ると共にこれを参照カードで補強する方針を取っている以上、現在のカード目録の形で使用する分には支障はない。だが年々累積して行くカードの量を考慮した場合、ある年度以降に発行された図書のカードだけでも冊子体で出版する事を考えねばならぬ。その準備として、1966 年以降の図書の分を別ファイルにし、この部分に就いては記述の面でも統一を計る事を計画している。

次にカード収集の期日の点も改善しなければならない。目下のところでは、整理の都合上、前の年に受入れた図書のカードを一年分まとめて送付して貰う事にしているが、この方法では、各館の受入図書に関する情報を遅滞無く呈供するには甚だ不満足である。将来は、一月分ずつ収集し、迅速に整理する態勢にもって行く積りであるが、この態勢ができ上がった暁には、総合目録は現在のカード形式のままでも一層活発に利用されることになろう。勿論電子計算機を使えば一日分ずつのカードを基にしてリストを作成する事も1年分乃至数年分の累積を冊子目録として創出する事も自由にできるものであるから、いずれはこの方法の採用にふみ切る事になろう。